

歌の発生覚え書き

——生物言語学からのアプローチ——

末次 智

声は人間の生理の、深くやわらかな部分に直結しているらしい。
(川田順造「聲」)

はじめに

私が対象とするフィールドの中心は、奄美と沖縄の島々である。とくに、そこに国家を形成した琉球王国の宮廷歌謡を中心に研究を行ってきた。しかし一方で、このフィールドでは、集落（シマ）ごとに、最近まで、あるいは現在でも、祭祀の場のなかで神と関わる神聖な言葉（歌）が伝えられてきた。これらは、たとえば、折口信夫がよく惹きつけ、その文学発生論を導く契機の一つとなったことは、よく知られている。これ以降、折口の仕事を通過した人々を中心に、文字以前の日本文学を推測する縁として、シマジマの歌を取り上げることが多くなった。彼らの代表的な成果を挙げれば、藤井貞和の『古日本文学発生論』¹⁾や、古橋信孝の

『古代歌謡論』²⁾、谷川健一の『南島文学発生論』³⁾などがある。これらは、同じフィールドを研究する私にも大きな影響を与えた。つまり、私も、文字以前の日本文学のあり方、そして、歌の発生について、これらの仕事を通して、考えさせられてきたのである。これらの歌が変化した先に、琉球の宮廷歌謡があるのだとすれば、その表現がもたらす「特別な力」、その源は、これらのシマジマの神歌につながることになるからである。たとえば、柳田国男が『遠野物語』に収録した、遠野のシマに伝えられた物語の中に吉本隆明が見出した「共同幻想」という概念を元に、古橋信孝は宮古諸島宮古島狩俣のシマの祭祀歌謡を読み解いていった。つまり、シマの人々の背後には、共同幻想が存在し、これをもとに説話や歌が表現として成り立つというのである。のちに、この方法は、「表現の共同性」という方向に昇華されることになり、本州弧の古代歌謡を読み解く方法となっていく。⁴⁾このような仕事の影響のもと、私もたとえば、シャーマニズムとの関わりで、文学の発生について考えてみたりもした。⁵⁾

そのような歌の発生についての私の関心の中で、二〇一〇年八月三〇日にNHKで放映された「爆笑問題のニッポンの教養」という番組の第一八回「はじまりはラブソング」という回で、本稿で中心的に取り上げることになる岡ノ谷一夫の仕事に出会う。それは、ジュウシマツという鳥がその鳴き声に法則性を持っているというもので、岡ノ谷はこれを「歌」と呼んでいた。これから具体的に確認していくが、岡ノ谷は人間（ヒト）にも、このような鳴き声に近い発声を行っていた時期があり、それが言語へとつながっていったと語っていた。岡ノ谷の関心の中心は言語の起源にあったが、私にとって衝撃だったのは、ジュウシマツのその鳴き声はまさに「歌」であり、歌の起源がここに示されているように思われたことである。そして、それは「言語」以前の表現なのである。その後、この番組を私が職場で担当する「うたの文化論」という講義の初回到「うたう動物はヒトだけか？」というテーマで五年間取り上げてきた。その一方で、岡ノ谷らの共同研究を文字で確認してきた。本稿は、その成果であり、歌の発生論における言語の存在を前提とするこれまでの方法とは異なるアプローチについての研究ノートである。

一、歌と身体と

なぜ、歌の発生を問題にするのだろうか。それは、言語表現一般の中で、歌表現が「特別な力」をもつからである。私たちは、

歌をうたいながら、聴きながら、そのことを目ころ感じている。その理由を明らかにするために発生を問うのである。言い換えれば、それは「歌とは何か」ということを明らかにすることでもある。

たとえば、川田順造は、歌、うたうことについて次のように定義している。

「うたう」という行為は、言語音の分節的特徴 (segmental features) と、韻律的特徴 (prosodic features) とを優劣のない関係で結んで、音声言語のメッセージを表現する行為であり、(中略) 身体性とのつながりも含めると、言語(学)的領域と音楽(学)的領域という、それ自体歴史の浅い固定観念の枠を根底的に無化し超えることによってしか、あるがままの、あるいはあるべき姿で、捉えられないものとみることが⁶⁾できる。この優れた定義は、うたうこと、歌に対する従来の考えをさらに推し進めることで、歌表現の力の源に近づこうとしていると言える。「音声言語のメッセージを表現する行為」としての歌、本稿の内容は、おそらく、川田のこのような考えを、さらに推し進めることにつながると思われる。

歌の発生、それは、つまり文学の発生だとも言えると思うが、これまでの文学の発生研究の中で、歌は人間に固有なものだといふことが前提としてあった。たしかに、たとえば動物の歌といった言い方があるとしても、それは人間世界の文化を動物に当てはめた比喩表現として用いられるだけであった。

たとえば、川田は、歌(うた)のこれまでの代表的な語源説について、次のようにまとめている。

「うた」は、大野晋らによれば、「うたがひ」「うたた」などと同根で、自分の気持ちをまっすぐに表現する意であるが、白川静は、祈りのときの特殊な発声を指す「うたき」(吼き)と関係する語であろうとしている。その白川によれば、「歌」は呵、訶などと一系で、祝祷の器を何枝で呵責して成就を求める意であり、その祈る声を呵、訶といい、その声調のものが歌であるという。他方、折口信夫は「歌ふ」と「訴ふ」の意味を重ね合わせて考えていて、元来「うたふ」という形で「うったへ」ただとしている。私はアフリカでの、……粉挽きうたや、お話の中で異界と人間界を結ぶメッセンジャーとしての重要な鳥と蛙の「うた」などに接した体験から、長いあいだ折口説に共感していたのだが、国語学的には折口説は支持され難いようだ。藤井貞和は一九七三年にすでに、遠藤嘉基の研究に依拠して折口説を否定し、同時に一種の恍惚状態、オルギーとしての「うた状態」というべきものに「うた」の原始の姿を見ようとし、その主張を最近も繰り返している。⁽⁷⁾

右に引かれる大野や白川の仮説は、「うた」の語源説だから当然なのだが、いずれも、歌の前提として先に言葉があることになつてゐる。だが、藤井のオルギーとしての歌説はどうだろうか。「うた状態」とはどのようなものか。最初に引いた川田の定義に引きつけられれば、分節的な特徴よりも音韻的な特徴の要素に近い状

態を指すようにも思われる。川田は、自らの考えとして「ことばもうたも、身体を離れてはありえない」⁽⁸⁾と、その身体性ということを強調している。それは、藤井の「うた状態」⁽⁹⁾にも通じるものだろう。

しかし、身体を問題にすれば、日本という地域性はもちろん、それは人間だけの問題ではなくなる。川田が「うたう場合は、関与する発声・調音器官の範囲が日常的な発話よりさらに広いので、一度条件付けられると、関与する諸器官のあいだの協動的な反射的運動連鎖によつて、なかば自動的な反射がより容易になる」と述べるに至つては、人間の生理的な条件に踏み込んでおり、それは、動物としての人間の領域に入つていかざるをえない。

二、小鳥の歌から人間の言葉へ

歌は、ほんとうに人間に固有な表現なのだろうか。文化という視点から、人間は、人間以外の動物と共通する要素をもたないのだろうか。この疑問にメスを入れたのが、岡ノ谷一夫らの研究である。本稿は、岡ノ谷らの仮説を、「人間の歌」研究としてとらえ直す試みである。

岡ノ谷は、まず自らの研究の動機について次のように述べている。

僕が知りたいのは、言葉の起源である。言葉の起源とは、言葉の進化とは異なる。起源とは、存在しなかったものが存在

するようになることであり、進化とは存在するものが世代を超えて変化することだ。人間はもう言葉をしゃべっている。だから人間をいくら研究しても、そもそも言葉が始まった理由はわからないだろう。人間の研究からわかるのは、言葉をしゃべるための仕組みに過ぎない。仕組みをわかることは大切なことだけれど、僕の興味から少しはずれている¹⁰⁾。

岡ノ谷の目的は、言葉の起源を明らかにすることである。これは、今まで人類にとつての長い間のテーマであった。しかし、人間をいくら研究しても、これは明らかにならないのだという。

これを動物進化の視点から明らかにしようとするのである。そのさいに、動物の、とくに鳥の鳴き声を対象として取り上げる。岡ノ谷らは、人間の言葉の起源を、小鳥の歌に求めようとしている。

鳥類はおよそ一万種いて、そのうちの半分以上が鳴禽類、つまり「小鳥」なのだ¹¹⁾。これらにおいては、発声信号がとくに豊かであるという。岡ノ谷は、その小鳥の歌について次のように述べている。

小鳥の発声信号には二種類ある。いっぽうは生まれつき発することができ、状況に依存して鳴かれる単音節の発生で、これらを地鳴きという。地鳴きは、ヒナが餌をねだるとき、親を呼ぶとき、敵がきたとき、仲間にあいさつするときなどそれぞれ異なる種類の音声を使う。もうひとつは、縄張りの防衛とメスへの求愛のために用いられる音声で、学習を必要として、複数の音声から成る発声であり、さえずりとよば

れる。この音声は、ヒトの耳にもメロディアスに聞こえるので、歌ともよばれる¹²⁾。

つまり、人間が歌と呼ぶ「さえずり」は、おもに求愛目的で用いられるのである。

このような鳥のさえずりを、人間の発声と比較しようとする前提として、鳥と人間の発声の仕組みについて、次のように述べている。

ヒトでは、声帯で作られた音が、のどや鼻、上あごの内側や舌、歯によりさまざまに変化して発声される。鳥でも鳴管で作られた音が気道、クチバシへと抜け出る間に特性を変え発せられる。発声のしくみが異なることをのぞけば、ヒトも鳥も、呼気をエネルギー源として、音を作り、音源から先がフィルターとして働いて音に多様性をつけるという点で、非常に似たくみで音を作っているといえる。ヒトにおいても鳥においても、発声することは、複数の独立した筋肉群をきわめて精緻に協調させることで可能になる行動なのである¹³⁾。

つまり、生理学的に、鳥と人の発声の仕組みは類似しているというのである。ここで、先の川田の記述を思い出してみよう。人間も鳥と類似した声を出す機能を持つのであれば、鳥が歌っても不思議はない。岡ノ谷らの研究は、そのことを示している。

三、ジユウシマツの歌文法について

岡ノ谷らは、小鳥のうち、とくにジユウシマツについて研究し

ている。その結果として、そのさえずりに複雑な文法があることを見だし、これについて次のように述べている。

まず、ジュウシマツは約八種類の短い鳴き声を出すことができます。この短い鳴き声を「エレメント」と呼ぶことにします。(中略)つまり、ジュウシマツの歌には、まずエレメントがあり、エレメントが組み合わさってチャンクになり、チャンクがつながって歌になる、という順序の構造があるのです。(中略)そこで私たちは、ジュウシマツの歌をチャンクで区切り、チャンクの並び方をチャートにしてみました。すると、けっしてジュウシマツはでたために鳴いているのではなく、一定の規則にしたがってチャンクを並べ替えながら歌をうたっていることがわかってきました。複雑にきこえるジュウシマツの歌にも、やはり規則があったのです。／チャンク並べ替えの規則は、人間のことばにおける文法の方法です。ことばの文法と区別するため、これを「歌文法」と呼ぶことにします。¹⁴⁾

この歌文法の発見とともに、次のようにも言う。

ヒナは、自分の親を含めた複数のオスの歌を聴いて、それを「切り貼り」し、自分の歌をつくっていたのです。つまり、ヒナは周囲にいる複数のオスの歌を「お手本」として、発声と歌文法を同時に学習しているのです。¹⁵⁾

ジュウシマツの歌文法は、世代を超えて学習されているといふのである。このような現象は、人間と鳥の他には、とくに鯨類

にしか今のところ見られないともいう。ここには、我々が通常鳥の鳴き声に抱いているイメージ以上の精緻な仕組みがあることが述べられている。これは、ほとんど文化といってもよいような事例ではないだろうか。これが人間の言葉へとつながっていくのである。

四、鳥の鳴き声から人間の言葉へ

右のような研究を基に、人間の言葉の起源について、岡ノ谷は、次のような仮説を唱えている。少し引用が長くなるが、そのまま引くことにする。

歌から言葉がどんなふうに使われたのか、僕が考えてきた仮説をお話しますね。たとえば、言葉をもつ以前のわれわれが、狩りの歌や食事の歌をうたっていたとします。歌詞のない、メロディーだけの歌をイメージしてみてください。／狩りと食事、その共通部分は何かというところ、どちらもみんなやることだから、「みんなでしょう」という文脈が入ります。／狩りの歌と食事の歌の両方に、同じフレーズが入っていたとすると、共通のフレーズが切り取られ、浮かび上がって聞こえてくるでしょう。共通のフレーズをうたうことで「みんなで何かしよう」というメッセージを伝えることになる。／そのような集団で育った子どもたちにとって、狩りと食事の歌の一部であった共通のフレーズは、「みんなで何かしよう」

という意味をもった単語になるんじゃないか。／＼こういうことが繰り返されているうちに、漠然とした状況に対応した漠然とした歌が、だんだん短く、より具体的な意味のメッセージをもった単語にかわってきたのではないだろうか。音の流れと、状況である文脈の流れを相互に切り分けるので、これを「相互分節化仮説」と呼んでいます¹⁶。

岡ノ谷は、この前提に、脳の働きの進化を見ているが、本稿では、そこまで立ち入ることをしない。

右の内容について、次のようにまとめている。

「単語が先にあり、単語を組み合わせていくことによって、ことができた」のではなく、「歌のような音の流れがまず先にあり、それを切り分けていくことによって、単語ができた」と考えるのです¹⁷。

これを踏まえ、次のように言う。

人間は「ことば」をもつより以前に、「歌詞のない歌」を歌っていたのではないだろうか¹⁸？

これは、人間の歌を考える上で、たいへん重要な仮説である。言葉より前に歌があった。歌の本質を考えるうえで、この指摘は見逃せない。もし、これが、人間の歌にも当てはまるのなら、歌の源は人類を超えてたいへん深いことなるからである。

つまり、歌の発生を問題とする私たちは、言葉の発生よりも遡らなければならぬことになる。それは、人間以前の歌を認めることにつながるのである。

五、歌うサルから人間へ

岡ノ谷らは、鳥の歌の事例を直接人間に当てはめるのではなく、人間の直接の祖先であるサルの鳴き声に注目する。インド・ボルネオ島の熱帯雨林に住むミユラーテナガザルの鳴き声について次のように述べている。

ミユラーテナガザルは、「ワ」「オ」ときこえる二種類のエレメントを出すことができます。これは生まれつき決まっております、それ以外の鳴き声を発音することはできません。たった二種類の音を組み合わせ、並べ替えることによって歌うのです。／＼ミユラーテナガザルは、「ワオーオオワオー」などと聞こえる鳴き声を数キロ四方に響きわたらせ、時には一時間以上もつたい続けます。／＼なんのために彼らはうたうのでしょうか。その目的は、おもになわばりを守るためや群れの結束のためです。歌には「警戒」「仲間（隣人）へのよびかけ」「家族内の呼びかけ」「自己アピール」「強い威嚇」の意味があることが知られています¹⁹。

しかし、「ミユラーテナガザルの歌には、ジュウシマツのようなはっきりした文法は」なく、「ワとオの並べ方が比較的似ている歌の場合、同じような意味を持つ」という程度のゆるやかな規則があるに過ぎないという。そして、ミユラーテナガザルは、「発声学習」ができないから、「人間やジュウシマツのように、あ

たらしい発音を覚えることは「できないともいう。これに対し、人間とジユウシマツは、音の流れの中からチャンク（かたまり）を切り出す能力をもっている。

だが、歌うサルはいた。そこで、人間の祖先が「ミユラーテナガザルのように、状況に応じて歌をうたっていた」と考える。そこから人間の言葉へつながるように考え出された仮説が、前節で取り上げた「相互分節化仮説」である。この仮説について、次のようにも述べている。

偶然に歌が重なり合ったただで、すぐに単語が生まれてくるとは考えられません。歌の中から単語が切り出されるのは、かなり長い年月を要したはず。／歌の中から切り出された共通部分は、最初は長かったのではないか。そして、歌から切り出された共通部分は、さらにこまかく切り出されたのではないか？そうしたプロセスを経るうちに、最終的に「単語」ができたのではないだろうか。²¹⁾

次に、サルの仲間のうち、人間だけが「呼吸をコントロールできる」、つまり、発声学習ができる理由について考察を進めていく。これができることによって、複雑な歌をうたうことができるようになるからである。もちろん、これは非常に長い期間「何万年、何百世代」²²⁾もかけたプロセスである。

そこで注目したのが、赤ん坊の泣き声である。出産一ヶ月後の赤ん坊には、泣き方に変化（個性）が見え、これに対し、母親は赤ん坊の要求を理解できるようになるという。そこで「ヒトの

赤ん坊は、親をコントロールするために、大声で、いろいろな泣き声を出すようになったのではないか？」という仮説を立てた上で、次のように述べている。人間の祖先は、独自の集団社会をつくり、火や石器を使い、みんなで外敵から身を守るようになったために、「赤ん坊が大きな声で泣いても、生命が脅かされることはなくなつた」とし、それで大きな声で泣いて意思表示ができるようになり、親に世話をやいてもらう方が生存に有利になった。このような考えを前提に、次のように言っている。

大きな声でいろいろな泣き声を出すためには、呼吸を自由にコントロールする機能が必要です。赤ん坊にとって大声で泣くことが生存に有利だったから、人間は呼吸をコントロールできるようになつた。そのため、発声学習の機能が備わり、「ことは」を持つことができたのではないだろうか……。²³⁾

岡ノ谷は、赤ん坊のときのこのような発声学習について、これを「産声起源説」と呼んでいる。そうして、人間は、複雑な歌をうたえるようになったというのである。

六、歌詞のない歌について

ここまで岡ノ谷の考えを見てきて、我々が歌を考えるうえで注目しなければならぬのは、岡ノ谷の言う「歌のような音の流れ」、「歌詞のない、メロディーだけの歌」、つまり、「歌詞のない歌」である。

ここで、ふたたび冒頭に引用した川田順造の定義を思い起こしてみよう。ここでは、歌の身体的な側面に踏み込みながらも、歌を「音声言語のメッセージを演出する行為」としていた。ということは、やはり先に「言語」があることが、つまり意味があることが前提となっている。

歌のことを考えるとき、川田の用語を借りれば「言語音の節律的特徴」と「韻律的特徴」のどちらが優先するのと言う問題が浮かび上がる。わかりやすく言えば、歌詞なのか、メロディーなのかということである。人間である我々は、歌を聞くとき、あるいは、歌をうたうとき、歌詞とメロディーのどちらに比重を置いているのかということは、歌について考えるさいによく話題になる。たとえば、私が近く付き合う学生とこのことについて話をしているとき、これには、個人差があるようにも思われる。そして、そのどちらでもない歌詞とメロディーのあわいに歌表現の位相があると、私も考えてきた。²⁵人間の歌について考える場合、このような想定は成り立つだろう。だが、動物の進化を前提とした歌の起源を想定した場合、岡ノ谷らの仮説に基づけば、歌詞のない歌、つまり韻律的な特徴を持つ音声の基底にあることになる。

そのように考えた時、人間の歌にも、韻律的な特徴のみを持つ表現を見いだすことができる。川田は、次のように述べている。

Ⅱの表象語より、さらに意味作用が離れたものとして、ほとんど音声の直接の表情——音色やリズム——のもたらす感
覚刺激だけに訴えるような、しかし間投詞とも区別される機

能をもった、「音感語」とでも呼ぶべき範疇Ⅲを、私は考えてみたい。²⁶

このような例として、川田のフィールドであるアフリカのモシ社会における「指示的意味の欠如した、しかし音調や句末の音素の組み合わせなど、音声のある特徴が伝達上の機能をもっている」なぞなぞの問いに出てくる句などを挙げている。さらに、次のようにも述べている。

このような語は、一般に、文字を用いない、つまり音声で文字によって規格化されていない口頭伝承に多いといえるが、文字を用いている社会でも口承性のない民謡には、この種の語とみなしてよいものが見出される。²⁷

そして、「日本の民謡で頻繁に用いられるはやしことば」を取り上げている。このような音感語には、他にも、川田も取り上げた楽器の奏法を言語音でおぼえる口唱歌や、たとえば、私には、子どもをあやすときの親の言葉にならない発声等といったものが見いだされる。

これらは、言葉を前提とした歌に比べて副次的な存在だとされてきた。しかし、歌詞のない歌を起源と考えれば、こちらの方が、それに近い表現であるだろう。もちろん、これらが直接鳥の歌につながるというのではない。これらは、人間の言葉が生まれた後に、これとの関係で文字通り副次的に存在するのだろうか。だが、その表現は、歌詞のない歌として、ジューシマツの歌と通じているのではない。川田は、このような音感語について、歌との関

わりで、次のように述べている。

となえ、うたううちに、声のメッセージは、それが元来もつていた韻律的な側面をあらわにしてくる。吐露し、訴え、あるいは発信者自身そのメッセージに感情的に浸るために、人は分節性と明示性の上に成り立っていたロゴスを解体し、音声の象徴性やことばの共時的な意味にむしろ頼ろうとする。さらに、言葉から分節的特徴が消去され、韻律的な側面だけになった音のメッセージとして、ここで取りあげる西アフリカの社会には、太鼓ことばや笛ことばがあり、より一般的に、音の韻律的側面によるコミュニケーションとして、後に述べる「音感語」や楽器による伝達の領域があるといえる。²⁹⁾

つまり、現代の社会でも、韻律的な側面だけの表現が積極的な意味をもつことがあるというのである。これは、ここで見てきたような歌の発生の流れを考えれば、当然のことではないだろうか。岡ノ谷の言うように、「言葉のはるか背後にこのような韻律的な側面だけの「歌詞のない歌」があるとすれば、我々の社会における、右のような表現は、歌詞、つまり意味によって抑圧されていた、身体に直接つながる表現が現代に噴出してきたものだということができないだろうか。

おわりに

先に確認したように、岡ノ谷らの研究の目的は言語の発生にあ

る。だが、岡ノ谷の著作を読んでいると、すでに小鳥の歌についての考察が、人間の歌にもつながることを彼自身も予想していることが、たとえば次のような記述でわかる。

音楽能力は、性的魅力につながりやすい。ミック・ジャガーなど、どうしようもない顔をしているが、彼とセックスするために楽屋を訪れる女性が跡を絶たなかったという。宮本常一の『忘れられた日本人』を読むと、ほんの百年前の日本では、歌が上手であればセックスの機会が増えるということがあたりまえのこととして捉えられていたことがわかる。³⁰⁾人間も動物である以上、性淘汰は重要な生存条件である。歌はそこに関わる身体表現として人間においてもその表現の基底で機能しているというのである。

岡ノ谷らの仮説にのっとれば、歌の発生は、人間以前の「歌詞のない歌」にあった。そして、それは、個体の生存条件にかかわる重要な表現だったのである。

(後注)

(1) 思潮社、一九八七年。

(2) 冬樹社、一九八二年。

(3) 思潮社、一九九一年。

(4) こちら辺の研究史の整理は、たとえば、古橋「研究史―方法について」『古代歌謡を読むために』(笠間書院、二〇一五年)に、古橋自身によって端的にまとめられている。

なお、古橋の右の文章も含む、本書「V研究史」（古橋・遠藤集子・坂根誠・関口一十三・石川久美子・島村幸一・森朝男）と「VI歌謡研究概観」（山崎健太・綱川惠美）は、文学の発生論を含む「古代歌謡」の戦後の研究成果とその現状を詳細にまとめており、参考になる。とくに本稿に関わる歌の発生研究については、山崎によって「歌の発生」（四一〇～四一三頁）としてまとめられている。

(5) 末次「成巫譚私注」『琉球宮廷歌謡論』。

(6) 川田、「文化を交叉させる」、六七頁。

(7) 川田、「文化を交叉させる」、七四頁。

(8) 川田、「文化を交叉させる」、七一頁。

(9) たとえば、藤井貞和、「文学の発生論と琉球文学」『古日本文学発生論 増補新訂版』思潮社、一九九二、二〇二～二二二頁、参照のこと。

(10) 岡ノ谷、二〇一一『言葉の誕生を科学する』、三頁。

(11) 岡ノ谷「小鳥の歌から言語の起源を考える」、八二頁。

(12) 同前。

(13) 岡ノ谷、二〇一〇『さえずり言語起源論』五～六頁。また、両者の共通点について、小西正一の研究成果を引きながら、次のようにも述べている。「ヒトの言語と小鳥の歌には多くの共通点がある。どちらも、①呼吸と発音（声帯と鳴管）と構音（気道、口腔、舌、唇またはクチバシ）の三つの独立した神経システムの緻密な強調を必要とした行動である。どちらも、②臨界期のある学習行動であり、特定の時期を逃すと著しく学習が困難になる。どちらも、③大脳の片半

球に局在した行動であり、優位半球の損傷で大きな障害を受ける」（音楽の起源と小鳥の歌」九四頁）

(14) 岡ノ谷、二〇一〇『言葉はなぜ生まれたのか』四九～五〇頁。

(15) 『言葉はなぜ生まれたのか』五三頁。

(16) 『つながり』の進化生物学』一四一～一四三頁。

(17) 『つながり』の進化生物学』六一頁。

(18) 『つながり』の進化生物学』六一頁。

(19) 『言葉はなぜ生まれたのか』八二頁。

(20) 『言葉はなぜ生まれたのか』八五頁。

(21) 『言葉はなぜ生まれたのか』九四頁。

(22) 『言葉はなぜ生まれたのか』一一八頁。

(23) 『言葉はなぜ生まれたのか』一〇五頁。

(24) 『言葉の誕生を科学する』五八頁。

(25) 末次、「うたとは何か」『琉球宮廷歌謡論』一五～一九頁。

(26) 川田、「口頭伝承論』二三頁。

(27) 『口頭伝承論』二一～二三頁。

(28) 『口頭伝承論』三六頁。

(29) 『口頭伝承論』一五頁。

(30) 「音楽の起源と小鳥の歌」九九頁。

(参考文献)

岡ノ谷一夫「動物のおしゃべり解説学 意味を伝えず気持ちを伝える小鳥のさえずり」『日経サイエンス』第三三卷第四号、二〇〇二年四月、日経サイエンス社。

岡ノ谷一夫・森阪匡通「ジュウシマツのメスは複雑な歌を好む

か?」『聴覚研究会資料』第三二卷第三号、二〇〇〇年五月、日本音響学会。

岡ノ谷一夫「音楽の起源と小鳥の歌」『Inter communication』第一

二二卷第二号、N T T出版、二〇〇三年春季号。

岡ノ谷一夫「動物のコミュニケーション行動とことばの起源」大

津由紀雄・波多野諠余夫編『認知科学への招待』、二〇〇四年

一月、研究社。

岡ノ谷一夫「生物学からみた言語学への期待」『月刊言語』第

三三卷第二号、大修館書店、二〇〇四年二月。

岡ノ谷一夫「小鳥の歌から言語の起源を考える」『月刊言語』第

三五卷第九号、大修館書店、二〇〇六年九月。

岡ノ谷一夫「小鳥の歌に見られる美の進化」小泉英明編『恋う・

癒す・究める』脳科学と芸術』工作舎、二〇〇八年一月三日。

岡ノ谷一夫・吉田重人「ハダカデバネズミ」(岩波科学ライブラ

リー一五二) 岩波書店、二〇〇八年二月六日。

岡ノ谷一夫・石森愛彦『言葉はなぜ生まれたのか』文藝春秋、二

〇一一年七月一三日。

岡ノ谷一夫『さえざり言語起源論(岩波科学ライブラリー

一七六) 岩波書店、二〇一〇年一月二五日。

岡ノ谷一夫・小川洋子『言葉の誕生を科学する(河出ブックス〇

三〇) 河出書房新社、二〇一一年四月三〇日。

岡ノ谷一夫・藤田耕司『進化言語学の構築』ひつじ書房、二〇

一二年三月二二日。

岡ノ谷一夫「オウムの物まね、犬のおしゃべり」日本エッセイス

ト・クラブ編『死ぬのによい日だ(〇九年版ベストエッセイ

集』文藝春秋、二〇一二年一月一〇日。

岡ノ谷一夫『つながり』の進化生物学』朝日出版社、二〇一三

年一月二五日。

岡ノ谷一夫・ビートたけし「達人対談 言葉は歌から生まれた

言語起源論の達人」『新潮45』第三二卷第二号、二〇一三年一

〇月、新潮社。

川田順造『口頭伝承論』河出書房新社、一九九二年六月三〇日。

川田順造『聲』ちくま文庫、一九九八年十月八日。

川田順造『文化を交叉させる』青土社、二〇一〇年五月二〇日。

川田順造『運ぶヒト』の人類学』岩波新書、二〇一四年九月一九日。

末次智『琉球宮廷歌謡論』森話社、二〇一二年一月二五日。

ノーム・チョムスキー『生物言語学と人間の能力』『言語と精神』

(町田健訳) 河出書房新社、二〇一一年七月一三日。

藤井貞和『物語文学成立史』東京大学出版会、一九八七年二月、

三二九〜三五〇頁。

藤井貞和『古日本文学発生論 増補新訂版』思潮社、一九九二年

四月一日。

(追記)

本稿は、日本口承文芸学会第三九回大会(於・國学院大学)での口頭発表を基にしている。そのさいのご意見が反映された内容となつているか心許ないが、発表のさいに、貴重なご意見を下さつた皆様、この場を借りて深くお礼を申し上げます。

(すえつぐ・さとし) 京都精華大学)